
はじめに

介護福祉の目的は、介護を必要とする人の自己実現であり、QOLの維持・向上です。かつて介護は、人間の生命活動やその営みの糧を求める労働をささえるために家庭内で行われてきました。しかし、介護が社会化され、国家資格である介護福祉士が誕生してすでに四分の一世紀が経過し、その間に専門職としての根拠となる介護福祉学の確立が模索されてきました。その介護福祉学は、根拠に基づいた援助実践の具体化である介護過程の導入をもって成立するといっても過言ではありません。

介護過程は、2000（平成12）年度から介護福祉士の教育課程に導入されました。その後の2006年カリキュラム改正で、従来の学問中心から人間中心の領域別（「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」）に大きく枠組みが再編成され、「介護過程」は、領域「介護」に含まれ、新たに150時間が設けられました。

本テキストでははじめに、介護とは何かを説明しています。ここで大事なことは、介護を必要としている人をどのように観るのかという学習者・援助者としての心構えを学ぶことです。そして、専門職として介護に携わる意味を理解することです。

つまり、介護福祉学を体系的に学べるように、テキストの前半では、考え方の基盤になる人間観や障害観、援助者としての価値観等を学び、後半では、具体的援助方法である介護過程の「理論編」と「実践編」に重点をおいた内容になっています。

「介護過程」の展開には各領域の学びの集大成が求められます。領域のすべてが、介護過程の展開の基礎・基本となる知識・技術となります。とりわけ展開の中核をなす介護過程「理論編」では、問題の認識—分析—立案—実施—評価の一連の流れによる思考過程に必要とされる科学的思考について説明しています。

科学的思考法の学習は、根拠に基づいた援助実践に必要不可欠のものです。思考過程の方法論の基礎を学び、介護過程の展開能力が身につくことこそ、個別性のある要介護者に役立てることができ、そのことで専門職として評価されるからです。本テキストではさらに、介護福祉の領域とは何か、専門職としてこれらの学習課題をどのように自分のものとすることができるのか、どう自分を鍛えることができるのかも学ぶことができるよう学習者の視点にたって、具体的にやさしく展開しています。

介護過程「実践編」では、ICF（国際生活機能分類）の視点に基づいた情報収集、アセスメント、計画、実践・評価等の介護過程の展開について、具体的事例を紹介しながら学びやすく工夫しています。「実践編」は、教員たちとともに学生たちの実習の指導をはさみながら4年間、試行錯誤をくり返してのやりとりのなかで確認され、でき上がった内容です。

2013年8月

編者を代表して 野中ますみ